

## 看護実習において学生が高齢者とケアリングするとき

大須賀 恵子\*1) 濱畑 章子\*2) 小松 美砂\*2) 大塚 静香\*3)  
佐藤 光年\*2) 福島 弘枝\*4) 菊井 友\*4)

**目的：**本研究は、養護教諭学生たちが、臨床実習における受け持ち患者（以下高齢者とする）に対して、ケアリング（ケア）を行った内容を分析すると同時に、高齢者から“ケアされる”体験のプロセスを明らかにする目的で行った。

**対象と方法：**2011年8月にS総合病院において臨床実習を実施したA大学養護教諭コース学生のうち、コミュニケーションが可能な高齢者を受け持ち患者として担当し、研究に同意が得られた6名である。対象学生に、実習指導教員による7項目の半構成的面接を1人約30分程度かけて実施した。面接内容より、逐語録を作成し、逐語録の記述内容から、学生が高齢者にケアリングを行った、あるいは高齢者からケアリングされていると思われる内容を質的記述的に分析し、コード化、カテゴリー化を行った。

**結果：**面接の逐語録を学生から高齢者へのケアリング、高齢者から学生へのケアリングの視点で分析した結果、高齢者—学生間に相互作用としてのケアリングが行われていた。学生からの高齢者への関わりを分析すると、学生の行動は、「会話」「傾聴」「手足のマッサージ」「手を拭く」「手をつなぐ」「足をさする」「足浴」その他小さな心のこもったふれあいをすることで、徐々に高齢者とのコミュニケーションの成立に成功していった。学生が臨床実習で受け持ちの高齢者にケアリングするときの、相手から受ける行動や感情などを分析した結果、「高齢者が自分に感謝してくれる」「高齢者が自分を気にしてくれる」「高齢者が自分を励ましてくれる」という3つのカテゴリーが抽出された。これらは、学生が高齢者とのやりとりの中で、高齢者から直接、目の前にいる自分に目を向けられたことで、相手から癒される瞬間であった。

**考察および結論：**学生が高齢者にケアリングされるということは、厳しい実習環境の中で高齢者から心を癒される体験である。この体験があればこそ、学生たちは実習をがんばって終了でき、成し遂げたことへの力強さと自信が身に付く。環境への適応力が低下している高齢者は、入院したとき、自己概念の低下、将来への不安などが生じやすい。制約の多い入院環境の中にいる高齢者が、実習学生を受け入れ、ケアリングすることは、学生にとって、人間のやさしさ、あたたかさを学ぶことになる。これは、将来、専門職として成長する学生への人間教育ともなる。これらのことを踏まえたうえで、教員や実習指導者が学生を教育する際には、看護技術を伝えながら、高齢者を一人の尊厳ある人間としてケアリングすることがその磁場にあることを全身全霊で、言語的・非言語的メッセージを総動員して伝えていくことが重要であると考えられる。

キーワード：ケアリング、高齢者、養護教諭学生、臨床実習、相互作用

\*1) 愛知学院大学心身科学部健康科学科

\*2) 四日市看護医療大学老年看護学

\*3) 名古屋大学医学部大学院医学系研究科博士課程

\*4) 聖霊病院

(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: osuka@dpc.agu.ac.jp

## I. 緒言

養護教諭学生の臨床実習については、目的・目標の設定、実習形態、実習内容など、従来から養成機関協議会や研究者らによって様々な検討がなされてきた。臨床実習は、養護教諭の専門性の向上を図ることを目指しており、実習で得た知識や技術が将来学校における保健管理、保健指導に結びつき、適切な判断と実践力を養えることが期待されている<sup>1)</sup>。したがって養護教諭養成機関のほとんどが必須科目に位置づけているものの、臨床実習には、さまざまな課題がある。一つは、養護教諭は教育職であることから、病院での臨床実習の必要性について疑問があるという声が養護教諭養成校の看護師の資格を持たない教員の一部から出ている。二つ目は、仮にその必要性を認めたにしても、実習施設の確保が困難であるという問題を抱えている。近年ヘルスプロモーションや地域との連携を学習することの重要性が認識され、保健所、保健センター、福祉施設など養成機関によって多様な実習施設・形態で実施されているのが現状である。

本学では、3年次養護教諭コースの学生全員が、N市のS総合病院において、7月下旬から8月中旬にかけての3週間（病院での実習は実質10日間）の集中実習を実施している。本学の臨床実習の特徴は、病棟実習の際にマンツーマンでケアを行う、受け持ち患者制をとっていることである。S総合病院入院患者の約80%が高齢者であるため、学生の殆どは本人の同意の得られた高齢者を受け持たせていただいている。受け持ち患者制は、患者・家族の同意を得ることが必要であるのは勿論のこと、学生が受け持つことによって、万が一にも患者に不利が生じないように、実習指導者や教員の細心の注意と、学生に対してのきめ細かな指導が求められる。

本学養護教諭コース学生の臨床実習は、開始後7年を経過（履修終了者155名）した。学生が病棟で受け持ち患者を担当する5日間のうちに、ほぼ全員が患者との良好な関係を成立させている。さらに、高齢者を受け持ち患者とした学生たちは、記録やカンファレンスなどで、“高齢者に癒された”という感想を記述したり話したりすることが多かった。つまり、高齢者をケアしているはずの学生たちが、同時に高齢者からケアされているのではないかと考えられる。そこで本研究においては、臨床実習体験におけるケア／ケアリングに着目した。

ケアリングという言葉は、ケアという名詞の動名詞

形で、ケアとほとんど変わらない意味で使用されている。看護界ではヒューマンケアリングという言葉が広く用いられているが、また、ケア／ケアリングと併記して使われることも稀ではない。ケアリングとは、人と人との関わりの過程であり、援助行動である。Watsonは、他者を、個性をもった個人として扱い、他者の感情を感じとり、その他大勢とは区別するとき、これがケアリングであると主張する<sup>2)</sup>。モースらは<sup>3)</sup>、ケアリングを調査し、ケアリングの5つの認識論上の見解をまとめた。すなわち、①人間の特性としてのケアリング (Caring as a Human Trait)、②道徳的な重要課題としてのケアリング (Caring as a Moral Imperative)、③情感としてのケアリング (Caring as an Affect)、④患者—看護師間人的相互作用としてのケアリング (Caring as an Interpersonal)、⑤治療的な介入としてのケアリング (Caring as a Therapeutic Intervention) である。

学生が臨床実習において、“高齢者に癒された”という体験を語るのは、おそらく④の患者—看護師間人的相互作用としてのケアリングが行われたためであろう。泉澤は<sup>4)</sup>、「ケアは、この生きられた世界体験の中すべてに存在する。その中であって看護ケアの専門性を問われれば、患者の思いや感情を読み、そして患者の真の望みを明確にしていきながら、健康に生きる人すべてが、幸福と安寧に向かうようにすることである」と述べている。Watsonや安酸は<sup>5-6)</sup>、「看護教育における大きな課題の1つは、いかに学生にヒューマンケアリングを教えるかということである」と主張している。筆者らも、患者—学生間における人的相互作用としてのケアリングは、お互いの関係性が成立することによって、学生の支援が患者や家族にとってプラス効果をもたらすことができ、学生にとっては、臨床実習目標を達成するための基礎的な位置づけになる。したがって、ケアリングが実践できなければ、実習目的・目標を達成することは困難であると考えている。

本研究は、将来児童生徒等を対象として健康管理業務に携わる養護教諭学生たちが、受け持ち高齢者に対してケアリングを行った内容を分析すると同時に、高齢者からケアリングされる体験のプロセスを明らかにする目的で行った。

## II. 対象と方法

対象；2011年8月にA大学養護教諭コース科目「看護実習」（6単位90時間：内S総合病院60時間 A大学30時間）を受講した学生のうち、コミュニケーション

ョンが可能な高齢者（65歳以上）を受け持ち患者として担当し、研究に同意が得られた6名である。

**方法**；同意の得られた対象学生に、実習指導教員による30分程度の半構成的面接を実施した。質問項目は、以下の6つを準備したが、一様に全部質問するのではなく、学生が回答可能であると反応した項目に限って質問した。

1. 高齢者との関わりから何を感じたか。何を得たか。
2. 受け持ち高齢者の特徴（性格・価値観・余裕があったかなど精神的状況）をどうとらえたか。
3. 高齢者から助言・アドバイスをもらったか。もらった場合その内容も。
4. 高齢者に信頼感のような感情を抱いたか。
5. 高齢者と接することについて、実習前はどのような気持ちでいたか。今までに高齢者と接したことがあったか。高齢者にどのようなイメージを持っていたか。
6. 実習後、高齢者についてどのようなイメージをもっているか。実習を終えた感想など。

**分析**；面接内容は、本人の許可を得て、ICレコーダーで録音した。逐語録を作成し、まず、学生から的高齢者への関わりを明らかにするために、学生が高齢者とコミュニケーション成立のためにとった行動やケアリング内容、高齢者への思いなどが記述されている部分を抽出し、まとめた。次に学生が高齢者からケアリ

ングされていると思われる内容を質的記述的に分析し、コード化、カテゴリー化を行った。カテゴリー名は精選し、抽象度を揃えた。分析には複数の共同研究者が参加し、分析結果の厳密性を確保した。

**倫理的配慮**；対象とする学生に本研究の趣旨を口頭で説明し、個人を特定しない形で公表することに対して文書による同意を得た後、愛知学院大学心身科学部健康科学科健康栄養学科における「ヒトを対象とする研究審査会」による承認を得た（承認番号1108）。

### III. 結果

#### 1. 学生たちの受け持ち高齢者への関わり

学生たちの受け持ち高齢者との関わりを図1に示した。6名の学生たち（AからFとした）の、実習開始前までの高齢者との関わりは様々であった。A、B、C、Fは、自分の祖父母などとの濃密で良好な関わりを持っていた。一方、Dは祖母との薄い関わり（本人の表現）を反省しており、Eは今までに高齢者と関わった体験が殆どなかったと語っている。

臨床実習において、学生たちは、受け持ち高齢者を持ち、「看護学で学んだ知識・技術を用いながら、高齢者と良好な関わりを持つことができる」という実習目標を達成するために、まずは高齢者とのコミュニケーション成立に向かって努力をしている。当初学生た



図1 高齢者と学生間のケアリング相互作用

中には、多かれ少なかれ不安があった。例えばその不安を「どこまで中に受け入れてくれているんだろうなと感じることが続いた」「私の担当させていただいた方は認知症だったんですけど……」「私の受け持ち高齢者はあまり多くを語ってくれないので、こちらから積極的にお話するようにしていました」「私は最初、ちょっとコミュニケーションが上手くいかなかった」などと表現している。

そこで、学生たちは高齢者とのコミュニケーション成立のために、「会話」「傾聴」「手足のマッサージ」「手を拭く」「手をつなぐ」「足をさする」「足浴」その他小さな心のこもったふれあいをすることで、徐々にコミュニケーションの成立に成功している。そして、最初は「ケアしてあげたい」「受け持ち高齢者のことをわかってあげたい」「何か自分にアドバイスできることがあれば実践したい」という上から目線であったのが、途中から高齢者から癒されていることに、高齢者から沢山のプレゼントをいただいていることに気付くことになる。そして、それに気付いた時、受け持ち高齢者は、「一人の人として大切な存在、尊敬する存在」に変化する。また、「高齢者は、ただ単に病気を抱えた弱い人ではなく、人生を前向きに生き、病気と真剣に向き合う逞しい姿」に触れて心を動かされている。認知症（重度、徘徊があったためにセンサーマット使用）の高齢者を受け持った学生も同様で、「慰めようという気持ちが、気がつけば反対に自分が慰められている」「学生生活について、職業人としての心構えなど、沢山のアドバイスをもらった」「失敗しても励まし、助言をくれた」など、認知症という病気を超えてその人を尊敬し、高齢者から励ましや癒しを得ている。

学生たちは、実習が終わりに近づくと、言葉だけでは伝わらない思いを、手作りのプレゼントや手紙に託している。そして、実習後のインタビュー時には、「高齢者と関わった時のことを思うと、何かあたたかい気持ちになる」という点では6名が共通していた。

## 2. 学生たちが高齢者から受けたケアリング分析結果

学生たちが、臨床実習で受け持ちの高齢者にケアリングするときの、相手から受ける行動や感情などを分析した結果、「高齢者が自分に感謝してくれる」「高齢者が自分を気にしてくれる」「高齢者が自分を励ましてくれる」というカテゴリーが抽出された（表1）。これらは、学生が高齢者とのやりとりの中で、高齢者から直接、目の前にいる自分に目を向けられ、癒される瞬間であった。

### 「高齢者が自分に感謝してくれる」

実習の短い受け持ち期間中、高齢者が学生に感謝の気持ちを言葉で表現したこと、また、学生の行為に対する高齢者の嬉しさの表現は、学生にとって驚きであり、新鮮な感覚であった。この感謝されると感じることは、高齢者との距離が近くなることであり、学生も嬉しさを感じることに繋がっていた。

学生Aは、感謝されたことを次のように語った。

“何か私にできることは少なかったけど、ほんの些細なこと、髪の毛が落ちているのを取っただけでも何度も「ありがとう」と言われたとか、ちょっとしたことでもやってあげたいというか、自分の中での気持ちの変化が大きかった……”

この気持ちの変化というのは、“やってあげる”という姿勢ではなく、自然に“あれをしよう、これをしよう”とその人のために何かすることを考える姿勢に変わったことを意味していた。

学生Fは自分が話すことがあまり上手ではなかったこと、受け持ち高齢者があまり話をしない人であったため、自身をどこまで受け入れているのか不安だったが、高齢者から喜びを伝えられたことで、その人に近づいた感じを抱いていた。実習中、病院の庭を散歩したとき、高齢者は、病室の外に初めて出たこと、自分のことを思って散歩してくれたこと、仕事として見るよりも人間的に関わってくれたと嬉しさを表現した。しかし、この学生は、高齢者の嬉しいという気持ちを、実習最後になって初めて深く理解することとなった。

“すごい喜んでくれていたのが、その時に（実習最終日）すごくわかって、うーん、何て言うか、その時に初めて気付いたというか……。そこまでのものを思ってくれたんだなあと思って嬉しかったし、良かったなあというふうに思いました。”

実習中に高齢者が伝えた嬉しさは、実習最後に、より感じることになり、学生も嬉しいという気持ちになっていた。このことは、学生にとって不安な気持ちを明るくさせる癒しともなっていた。また、実習期間のすべてを肯定的に受け止めることに繋がった。

学生Bは、他の学生が受け持ち高齢者に感謝される様子を見て、間接的に自分のことのように嬉しくなったと語った。

“学生が足浴をやったら高齢者がすごく感謝していて、「ああ、こんなことまでしてくれて」と、表情が変わったので、「すごいなあ」と思いました……。私もやってあげればよかったと思いまし

看護実習において学生が高齢者とケアリングするとき

表1. 受け持ち高齢者との関わりを通して学生が感じたこと

学生	受け持ち高齢者との関わり	高齢者から学生がケアリングされた内容	6名から抽出したカテゴリー
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の中に「ちょっとしたことでもやってあげたい」という気持ちの変化</li> <li>ちっちゃなふれあいも感謝してもらえる</li> <li>学校で勉強したことだけを出すのではない</li> <li>この人のためにやってあげたい気持ちが出てくると、だんだん信頼関係が築ける</li> <li>会話でなくても信頼関係は築ける</li> <li>自然にマッサージ、手をつないだりすると、高齢者の表情が明るくなった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小さなことにも感謝してくれる</li> <li>つながりを感じる</li> <li>会話がなくても信頼関係は築ける</li> <li>高齢者の顔が明るくなった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 高齢者が自分を気にしてくれる</li> <li>* 高齢者が自分に感謝してくれる</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>あまり多くを語ってくれないので、こちらから積極的にお話をするようにしていました</li> <li>独特の雰囲気があり、こっちはもゆったり、お話しました</li> <li>自分があるって、私はこうだというものがあるように感じました</li> <li>そんなに関わってもいいのに気にしてくれているんだと思いました</li> <li>一緒にいると懐かしくあたたかい感じがしました</li> <li>他の学生が、自分の受け持ち高齢者に足浴をやったら、すごく感謝していて、「すごいなあ」と思いました</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>気にしてくれると感じる</li> <li>懐かしくあたたかい感じがした</li> <li>足浴をしたら感謝してくれた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 高齢者が自分を励ましてくれる</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>認知症がある、純粋で素直、かわいい、愛おしい</li> <li>受け持ち高齢者から気づかいされる</li> <li>本人（高齢者）を慰めようという気持ちが、気がつけば反対に自分（学生）が慰められている</li> <li>高齢者は私（学生）の事を気にかけてくれる</li> <li>高齢者から沢山アドバイスをもらった、学生生活について、職業人としての心構え</li> <li>高齢者は失敗しても励まし、助言をくれた</li> <li>高齢者はある程度のことはあたたかい目で見てくれる、先生のような感じ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>気にしてくれていると感じる</li> <li>励ましてくれる</li> <li>慰められている</li> <li>アドバイスをしてくれる</li> <li>あたたかい目でみてくれる</li> </ul>	
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>高齢者が学生の立場を受け入れてくれた</li> <li>高齢者から元気をもらった</li> <li>高齢者は気遣ってくれた</li> <li>高齢者との関わり、会話が支えになった</li> <li>高齢者は病気をよい経験と受け止めていた</li> <li>高齢者はお世話をしてくれる学生が来てくれることも幸せと言う</li> <li>高齢者に励まされた</li> <li>高齢者とは大事なつながりをもてた</li> <li>高齢者からの励ましの言葉が大きかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実習生の立場を受け入れてくれる</li> <li>元気をくれる</li> <li>気遣ってくれる</li> <li>会話が支えになる</li> <li>実習生が来てくれることも幸せと言う</li> <li>励ましてくれる</li> <li>つながりを感じる</li> </ul>	
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニケーションのとれる人</li> <li>学生がしゃべりやすいように気を遣ってくれていた</li> <li>自分のおばあちゃんみたいな感じだった</li> <li>家庭ではお嫁さんとサバサバした付き合い</li> <li>精神的に安定している</li> <li>高齢者は病気に対する不安があった</li> <li>高齢者から何か励まされている感じ</li> <li>高齢者から実習終了後着替えて帰る前に立ち寄ってと言われて、必要とされている感じをもった</li> <li>他の高齢者と比べて言い易かった、何か言ったときに受け止めてくれた、アドバイスもしてくれた</li> <li>正直に言ってくれた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>気遣ってくれる</li> <li>励まされる</li> <li>必要とされることを感じる</li> <li>実習生のことを受け止めてくれる</li> <li>正直にいつてくれる</li> <li>助けてもらった</li> </ul>	
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>どこまで中に受け入れていつてくれているんだろうなと感じることが実習当初続いた</li> <li>家族の見舞いを大事に、楽しみにしていた</li> <li>かわいらしい感じの人、甘えたいのが強い人</li> <li>一人でいる時間が嫌で寂しがり屋</li> <li>高齢者から「仕事をしていく上で冷たくならないでほしい」と言われた</li> <li>学生が高齢者に接する時、仕事として見るのではなく、人間的に関わってくれることがすごく嬉しいと言っていた</li> <li>最初は不安でしゃべっていたが、相手（高齢者）も話してくれるようになったので、安心感をもった</li> <li>高齢者のことを少しずつわかってきたので、関わり方もわかってきた</li> <li>最後の実習日、他の学生のように盛り上がり話せるのか不安だったが、高齢者が実習でやったことを喜んでくれたのがわかった。その時初めてそこまでのものを思いついてくれたことがわかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感謝される</li> <li>安心感を抱く</li> <li>喜んでくれる</li> <li>相手から話してくれる</li> <li>自分のことを思いつてくれる</li> </ul>	

た。足浴ただけで、そんなに感謝されることってあまりないですよ。それを見ていて、こっちまで嬉しくなりました。”

この学生は、足浴が感謝されるほどのケアではないと思っていたが、そのような些細なことをする行為が、高齢者にとって大きなことであると気がついた。

#### 「高齢者が自分を気にしてくれる」

学生は自分でも気がつかないうちに、受け持ちの高齢者が気にしてくれることを感じていた。この感情は実習する学生の厳しい状況を安堵させることにつながっていた。

学生Cは、受け持ちの高齢者から気かけられ、慰めてもらっていたことに気がついたことを、次のように語った。

“私は、高齢者が昔のこととか現状について訴えていたので、慰めようという気持ちで話を聞いていたんですけど、気がついたら反対に自分が慰められていて、やさしい言い方、自分が言いたいことがあってもどこかで相手のことも気にかけてくれるような、そんな優しいところがありました。”

この学生は目上の高齢者が訴えていることに対し、慰めようとしたが、返って、その高齢者の人格の高潔さに触れることになり、慰められたのは自分であると感じた。高齢者から、常に何らかの形で、気にしてもらっていた。

また、学生Dは、受け持ちの高齢者から「椅子に座ったら」「今日はどうですか、体調は？」と聞かれることで、元気をもらったり、実習を頑張る気持ちになり、実習中の支えになっていた。

#### 「高齢者が自分を励ましてくれる」

学生Cは、受け持ち高齢者に関することで看護師に叱られたとき、受け持ち高齢者からの励ましを次のように語った。

“私は（自分が）叱られているところを受け持ち高齢者は知らないと思っていたのですが、「実習中にはそんなこともあるんだよ」って言われて、「でもそんなことは気にしなくてもよいし、あなたは悪くない」ということまで言ってくれて「看護師の説明が悪かった」とか……。励まし助言をしてくれました。”

実習中に看護師から叱られたことを、知らないと思っていた受け持ち高齢者が知っていたこと、そして、知っていたことで励ましの言葉かけをもらったことは、

学生の心を安堵させていた。学生は悪くないと言明してくれたことは、学生にとって力強い味方となる言葉であった。

学生Dは、受け持ち高齢者とのつながりを次のように表現した。

“信頼感かわからないですけど、すごく大事なつながりはもてたかな……と私の中では思えました。私もその方がいなかったら、結構辛い思い出しかなく終わったかなって思います。励ましの言葉が大きかったです。”

具体的に高齢者から発せられる励ましは、学生の心の中で、受け持ち高齢者への信頼感、つながりになっていた。

## IV. 考 察

### 1. 高齢者と学生間のケアリング相互作用

ケアリングが1989年に日本の看護界に登場して以来、看護教育において取り入れられている。新しい看護系の大学ではカリキュラムの基盤であったり、講義科目の内容であったりするが、研究されている多くは、臨床実習に関連したケアリングと言われる<sup>7)</sup>。ケアリングの対象には、患者—学生、学生—実習指導者、教員などがある。しかし、その数をみると、2000年から2010年までの研究文献のうち、臨床実習におけるケアリングは4件のみであり<sup>8)</sup>、今回の臨床実習における学生—患者間のケアリング研究は意義があると考えられる。

高齢者を対象とした実習、すなわち、老年看護学の実習は、高齢者施設、病院で行われている。その教育目的の中心は高齢者の理解であるためか、実習の学びも高齢者の理解、高齢者看護の実践が多い<sup>9-10)</sup>。これらは、学生側に立ち、学生が何を高齢者に実践できたのか、高齢者から何を学んだのかという視点である。ケアリングはケアする者、ケアされる者の双方の関係で成り立つものであるとすれば、高齢者から何をケアリングされたのかという視点は重要であると考えられる。この点からすると、今回の研究が高齢者からのケアリングが「感謝してくれる」「気にかけてくれる」「励ましてくれる」という結果は、高齢者を理解すると言う視点からみても意義が大きい。

操らは<sup>11)</sup>、「人が人に対して手を差し伸べ、手をあて、その人のために何かをしてあげたいと思うこと、してあげることが看護という領域に限らず、人が共生していくためには不可欠な人間のあり様である。このよう

な人間のあり様がケア／ケアリングという言葉で言い表せるものであり、人間としてどのように生きていくかという人間の生の質に影響を与えるものである」と述べている。高齢者は長い人生の中で悲しみ、苦しみ、喜びなどを経験し、価値観、信条、人生観などを培ってきた。これらの3つのカテゴリーは、実習学生が自身を受け持ってくれること、すなわち、自分のために何かをしようと考えていることへの感謝、学生の実習がうまくいくように気をかけ、頑張るように励ますことが自然に表現されたと考える。学生が高齢者にケアリングされるということは、厳しい実習環境の中で高齢者から心を癒される体験である。この体験があればこそ、学生たちは実習をがんばって終了でき、成し遂げたことへの力強さと自信が身に付く。一方で、環境への適応力が低下している高齢者は、入院したとき、自己概念の低下、将来への不安などが生じやすい。制約の多い入院環境の中にいる高齢者が、実習学生を受け入れ、ケアリングすることは、学生にとって、人間のやさしさ、暖かさを学ぶことになる。これは、将来、専門職として成長する学生への人間教育ともなる。

入院した高齢者へは、自尊心の維持や気かけられる感覚が持てるように援助する必要がある<sup>12-13)</sup>。今回の研究結果は、高齢者と学生双方向のケアリングがどのような形で行われているのかを明らかにしてきた。ただし学生は、自身がケアリングされていることに気付かない場合もあると考えられる。教師や実習指導者は、学生たちが高齢者からケアリングされていることを感じ取ることができるようにサポートすることが大切である。なぜならば、高齢者は若い実習学生にケアリングすることで、自身の自尊心や気かけられることを感じ、ケアリングされているのであるから。

## 2. 教育という観点からの学生のレディネス (readiness)

臨床実習において、学生と高齢者間にケアリング相互作用成立の可否を決定づける背景には、臨床実習に至るまでに、「看護」という側面から講義や学内演習を通して、学生を教育してきた教師および病院で直接学生指導に当たる実習指導者(看護師)の影響が大きいと考える。安酸は<sup>5)</sup>、学生が“教師は患者に対してヒューマンケアリングを行い、学生に対してはヒューマニスティックな学習援助をしている”と感じた場合、学生は教師の姿をロールモデルとして、ケアリングを学び、自分自身も患者に対してヒューマンケアリングができるようになっていくのではないだろうか。つま

り、学生は「ケアされる人」としての経験をしながら、「ケアする人」である教師をモデルとして、「ケアする人」として成長していくのではないかと述べている。このことは、そのまま実習指導者にも当てはまるのではないか。さらに学生同士のダイナミックな相互作用の影響も忘れてはならないだろう。例えば、A大学にける学内看護演習(2012年春学期、現3年生対象)において学生同士ペアを組んで互いに足浴を実施した後で、ある学生は次のように語っている。

「自分が足浴をやってもらった後、心が落ち着き感謝の気持ちでいっぱいになった。自分がパートナーの足浴を実施した後も、慣れない自分の動作でも“ありがとう!”と言ってくれたことが嬉しく、足浴をやって良かったと思えた。感謝の気持ちを伝え合うことで、お互いに良い気分になり、関係も良好になる。足浴は、患者の見た目だけでなく、お互いの心もきれいにすることができる援助だと思った」と。

池川清子は<sup>14)</sup>、「ケアは人間が人間であるための磁場というか根拠であり、人間の本質(人間性)に属する能力であるから、看護の本質であるテクネー(技術)は、配慮的行為・ケアとして現れるとき、それはフロネーシス(賢慮・思慮)といえる」と述べている。さらに、「ナイチンゲールの著作では、ケアは看護の技術としているが、そこには単なる技術としてではない、テクネーやフロネーシスが明らかにされている」としている。そして仲島は<sup>15)</sup>、「ナイチンゲールの看護はアートであるとされているが、池川はここに、ナイチンゲールの示唆した看護の様々な技術はフロネーシスであったという意味で、今日のケアリングがあったことを明らかにしている」と論じている。

学内演習において体験できた学生間のケアリングは、臨床実習の場で患者とのケアリング体験をする基盤となる。これらのことを踏まえたうえで、教員や実習指導者が学生を教育する際には、看護技術を伝えながら、患者を一人の尊厳ある人間としてケアリングすることがその磁場にあることを全身全霊で、言語的・非言語的メッセージを総動員して伝えていくことが重要であると考えられる。

斎藤喜博は<sup>16)</sup>、「授業とか教育とかは、いま現実に目の前にいる子どもたちを相手にして、子どもと生きた対応・交流が教師にできることによって、また子どもと子ども、子どもと教材とが、生きた対応・交流ができるようにしてやることによって、生き生きと子どもをつくりかえ、子どもを発展させていくことができ

る」と述べている。学生たちは、高齢者とのケアリング相互作用を体験することによって、養護教諭としてのコミュニケーション技法に止まらず、教育の本質を学んでいると考えられる。

本研究を纏めるに当たり、ご協力いただきました実習病院の看護部長様始め実習指導者の皆様、学生の受け持ちになることを快諾してくださいました患者様および家族の皆様、インタビューに協力してくれた6名の学生たちに厚くお礼申し上げます。

### 引用文献

- 1) 本田優子, 岡田加奈子, 天野敦子ほか (2003). 教育学部養護教諭養成の臨床実習に対する卒業生の学習ニーズ, 学校保健研究, 45 (2), 102-120.
- 2) Watson, J. (1988). Nursing: Human science and human care, A theory of nursing. New York: National League for Nursing, 34.
- 3) J. M. Morse, J. Bottorff, W. Neander & S. Solberg (1991). Comparative analysis of conceptualizations and theories of caring image, Journal of Nursing Scholarship, 23 (2), 119-126.
- 4) 泉澤真紀 (2009). ケアリングは看護の何なのか —テクノロジー時代におけるケアの倫理と看護—, 北海道文教大学研究紀要, 33, 1-10.
- 5) 安酸史子 (2001). 看護教育におけるケアリング —モデリング, 対話, 態度—, Quality Nursing, 7 (1), 17-22.
- 6) Watson, J., 安酸史子訳 (1999). ケアリングカリキュラム —看護教育の新しいパラダイム—, 医学書院, 266-272.
- 7) 川村友紀 (2010). 看護教育におけるケアリングに関する研究の概要 —近年の国内文献の動向と内容の検討—, インターナショナル Nursing Care Research, 9 (3), 43-50.
- 8) 山内朋子, 筒井真優美 (2011). ケアリングの研究動向, 看護研究, 44 (2), 129-148.
- 9) 千葉真弓, 原田美香, 細田江美ほか (2008). 老人保健施設での老年看護実習における学生の学び, 長野県看護大学紀要, 10, 21-32.
- 10) 大淵律子 (2009). 老年看護学の看護実践能力を高める教育のあり方, 三重看護学誌, 1, 1-8.
- 11) 操華子, 羽山由美子, 菱沼典子ほか (1996). ケア／ケアリング概念の分析—質的・量的研究から導きだされた所属性の構造, 聖路加看護大学紀要, 22, 14-28.
- 12) 赤塚大樹, 濱畑章子共編集 (2005). 高齢者の心理と看護・介護, 培風館, 東京, 101-105.
- 13) Alexander Tesfamichael (2011). A pivotal caring experience for a nursing student, International Journal of Human Caring, 15 (1), 65-67.
- 14) 池川清子 (1991). 看護—生きられる世界の実践知 (フロネーシス), ゆるみ出版, 123-124.
- 15) 仲島愛子 (2007). 「ケアリング」をめぐる今日の状況についての考察, つくば国際短期大学紀要, 35, 1-22.
- 16) 斎藤喜博 (1969). 教育学のすすめ, 筑摩書房, 東京, 132-149.

最終版平成24年7月17日受理

## When Students and Elder People Care for Each Other During Nursing Practice

Keiko OHSUKA, Akiko HAMAHATA, Misa KOMATSU,  
Shizuka OTSUKA, Mitsutoshi SATO, Hiroe FUKUSHIMA, Tomo KIKUI

### Abstract

**Objective:** The current study was performed to analyze the content of patient care by school nursing students during their clinical training, and to make clear the process of their experience of “being cared for” by the elderly.

**Subjects and methods:** Subjects were six students of the school nursing course of “A” university who received clinical training at “S” hospital in August 2011. All students were in charge of elderly patients with whom communication was possible. Each participant was submitted to a 7-item, semi-structured interview taking about 30 min, conducted by the training instructor. The transcript was prepared from the interview and parts of the description where trainees expressed that they felt like being cared for by the elderly were extracted and categorized.

**Results:** Analysis of the interview’s word for transcript from a perspective of care by the students and by the elderly revealed that there was interaction between patients and students. When we analyzed the concern of students towards the elderly, actions such as “conversation”, “listening”, “massage of extremities”, “hands wiping”, “hands holding”, “feet rubbing”, “foot bath” and other thoughtful contacts lead them to gradually succeed in the establishment of communication with the patients. On the other hand, when we analyzed the actions and feelings students received from the patients they were in charge of during the clinical training, three categories were extracted: “the elderly are thankful to me”, “the elderly are concerned about me” and “the elderly give me encouragement”. These feelings, arising when students felt that they were paid attention to by the elderly, demonstrate the moment when they were refreshed by the patients.

**Discussion and conclusion:** In a severe training environment, the fact that students felt like being cared for by the elderly represents a sense of internal relief. This experience gave students vigor and confidence to accomplish their tasks and conclude the training. When elderly people with decreased adaptability to the environment are hospitalized, they are prone to problems such as lower self-image and uneasiness about the future. Acceptance and care of trainee students by elder people who are exposed to a severe hospitalization environment is an opportunity for the students to learn about human gentleness and warmth. And this is also a kind of human education for professionally growing students. Based on these aspects, we conclude that it is important for teachers and training instructors, along with the transmission of nursing techniques, to be all mobilized to pass on a verbal and non-verbal message that the focus is to take care of the patient as a human being with dignity.

Keywords: patient care, elderly, school nurse student, clinical training, interaction

